

## 黎明の時

霜鳥 俊一

明治22年8月25日、関東のこの日の熱風も歩く西洋人宣教師にとってはさわやかな風に感じていたのだろう。

江戸幕府300年の禁教令は曖昧なまま、明治政府のもと西洋文化が宣教師と共に堰を切ったように日本に押し寄せてきた。私たちの先人は不安と喜びと戸惑いを持って見つめていたに違いない。だが、外国人宣教師による巡回ミサのうわさを聞けば、身の危険を省みずそこに駆けつけ、ある者は在所氏名、洗礼名を告げ跪き罪の許しを乞い、ある者は家族の洗礼を願ったはずだ。なぜなら、彼らの信仰は「この時」をじっと息を殺しただ待っていたわけではなかったからだ。野の花のように、芽吹く時を信じ、育ててきたのだ。

太田教会25周年記念誌によれば、明治以降太田市・足利市を中心とする両毛地域で初めて公式の洗礼式が行われたのは太田市であったことが記されている。現在の太田市東長岡町で5人が洗礼を受け、翌日このうちの一組の結婚式が同宣教師によって行われたと言う。その方々を誇りに思う。先駆的なということではなく、ゆるぎない信仰へ敬意を表したいし、初めて出会う西洋人宣教師に無条件に心を開いていた先人たちの信仰に敬意を表したい。

当時の宣教活動は想像を絶するものがあつたという。歩くしか交通手段を持たなかった時代にもかかわらず、彼らは「北関東」という広大な地を担当し奔走したのであろう。そして、たどたどしい言葉と行いで「種」を蒔き続けたのだ。命尽きるまで。あれから、この地に教会が建てられるまで、太平洋戦争等に翻弄されながら実に65年の歳月を要した。

昭和29年、その季節は覚えていない。初秋であつたろうか。それは大きな問題ではない。初めて「私たちの教会」を訪れたとき、高い日差しがあつたような記憶がある。10人に満たない信徒の安らぎの場所、喜びは有つたのであろうが、劇的なものではなく、慎ましくそれぞれが、それを噛み締めていたに違いない。名前を思い出せない顔が脳裏をよぎる。機が熟する2000年のご計画の中の季節であつた。

その教会は、主のご降誕のようであつた。最も高貴な方が、最も貧しい場所に、最も貧しいお姿でお生まれになった。私たちの教会も、緑に囲まれた小鳥のさえずりが聞こえる場所でもなければ、閑静な住宅街の一角でもなかつた。そこは、夕暮れから一時の享楽を提供する料理屋「ポンチ」の二階であつた。太田市本



定方家所蔵の  
古いマリア像



現在の「ポンチ」跡（左側の二階）

町、戦前の歓楽街の名残を残したその場所。定期的に東武線の列車が線路を軋ませ、時として階下から三味線の音色が聞こえてきたのである。主ご自身が人間の姿としてこの世にお生まれになったその理由をそのままに、最も必要とされる場所に初めての教会が、キリストの体である教会が定められたのである。確かに料理屋「ポンチ」の二階から流れてくる聖歌に誘われるようにして、僅かながら教会を訪れる人があった。



当時を偲ばせるお聖堂があった部屋

50年の教会の歴史を語るには、その前史にも触れておかなければならない。そして、時代背景を知っていただく材料として、私のことも少し語らせていただきたい。私は大正7年10月新潟県妙高村に生まれ、15歳の時に埼玉県鴻巣市の兄の写真館に勤め始めた。2、3年後熊谷市の北村写真館に就職、そこの主人に誘われ入信、18歳で洗礼を受けた。洗礼名は「ウバルド」、フランス人宣教師メイラン神父がつけてくださった。この洗礼名にどんな願いが託されていたのかはわからない。「聖ウバルド」はイタリア・グビオの司教であり、後で知ったが靈魂のための熱心と苦行と祈りに高德な聖人である。21歳で応召、中国(中支)で作戦行動記録部隊写真班に配属され、3年後の昭和17年10月に除隊した。帰国後太田に移り、中島飛行機写真班に職を得、25歳で結婚、現住所に新居を構えた。



1944(昭和19)年・結婚

敗戦直後は生活に追われていたが、落ち着くにつれ遠方の教会を訪ね、あるいは巡回のミサを知ればそこを尋ねた。妻への公教要理の勉強は私が行った。貧しさが神の存在を確かにする。そんな時、当時、現在の東本町の富士重工に米軍第一騎兵師団が駐留していて、そのチャペルでプロテスタントの礼拝とカトリックのミサが交互に行われていることを知った。そのミサを受けるために、前橋教会のシャルボノ・ペトロ神父に受洗証明書を書いていただき、そこに通うようになった。守衛に受洗証明を見せるといつも守衛は「ナニガカイテアルカ、ワカラナイネエ」と言って後ろに妻を乗せた私たちの自転車を通してくれた。当時の神父の名は分からない。従軍神父であり、当然のことながらミサはラテン語であり、説教は英語で行われていた。富士重工の門を入れればそこは異国であり、私達は異邦人であった。耳に響く言葉の意味すら分からず、心細かったがそれでも心は安らぐのである。献金はアメリカ式でミサ中に銀の盆が回ってきて、米兵たちはドル紙幣をそこに乗せていたが、貧しい日本人はすまない心で日本の硬貨をそっと隠すように入れたのを覚えている。

その後、富士重工の北門近くにあった関東短大の応接間を借り日曜のミサが行われるようになった。掃除のために、ミサの時間よりも早く行くのであったが、神父はすでに来ていて、庭を歩きながら聖書を読み黙想をしていたのが印象的であった。体が大きなフィン神父であった。彼は、決して日本語がうまくなかったが臆せず、片言の日本語で説教するその勇気を見ていると、主が彼と共にいることを実感させてくれた。

その後、安靖堂の二階や農協の応接間を転々としながら信仰を支えた。信者が 10 人に近くなった時、今は亡き岡田アキさんが、「10 人近い信者がいるのだから神父が常駐して欲しい」と申し出、当時の管区長がビール好きなことを知り、神父に無理に僅かなビールを持たせ買収するようにして太田教会が発足したのだ。こうして料理屋「ポンチ」の二階の教会が実現するのであるが、今にして思えば懐かしいとしかいいようもなく、心のよりどころを得た当時の信者の心情を理解していただきたいのだ。

初代主任司祭はコールマック・ダンカン神父であった。料理屋「ポンチ」二階の教会はいつまで続いたろうか。それ程長くはなかったと思う。2 代目の教会は、群馬銀行の交差点を少し北に走り、国道 407 号沿いの少し東へ奥まった日本家屋であった。コールマック神父は 2 年ほどの期間であった。彼は行動的ではなく、比較的教会の中で祈りと共に過ごす姿を思うと、彼はまさに修道僧であったと思う。

2 代目の神父は、ルシアン神父であった。前任者とは対照的な神父で行動的であった。彼はアシジの聖フランシスコの生き方、清貧、貞潔、従順の精神を徹底的に実践している宣教師であった。一つの例に過ぎないが、神父に眠りにつける蒲団がないことを知った貧しい信徒がやっとの思いで作った蒲団は、次の日そこにはなかった。彼にとって、全ての物質は主の道具でしかなかったのだ。又、戦争の傷が顕著になってきた時期であった。米兵と日本人女性の間に生まれた子供の養子縁組に奔走した。



日本家屋の教会の聖堂にて(1956 年頃)

そして一方では宣教に必死に取り組んだ。拙宅での土曜の夜の公教要理は、協力者によって写場と待合室、居間を全部使って行われたが、それでも南側の廊下まで人は溢れていた。この頃のことを思い出す度、仕事を終えて食事もとらずに我が家に自転車で大泉から駆けつけてくる若かった山崎信一さんのあの時の姿を思い出す。そして彼のたどたどしい言葉遣いを。種まきの時期であった。小学生、中学生、高校生・大人の三つのクラスが用意され多くの信徒が誕生した。そこに居たそれぞれが、不自由な日本語を駆使する神父の姿に主の救いを理解したに違いない。どんなに饒舌な言葉であっても聞く耳がなければ風の音に等しいと今にして思う。妻の葬儀の時、井上英明君はあの時の風景を「山上の垂訓」のようだったと弔辞で語った。そうであったかもしれない。救いを求めようとする人が居て、救いを伝えようとする人がそこに居れば、何時だってそこは「山上の垂訓」の場面なのだ。公教要理を終えてそこに集まった人たちを見送った後、家族と共に見上げた星空を思い出す。冬の天の川の美しかったことを。我が家に集まった人たちもあの空を見ていたに違いない。

日本家屋の教会は、日本家屋で西向きの玄関を入ると、司祭の事務所、兼寝室、兼香部屋、兼告解室の部屋があり、廊下を北に少し向かうと廊下の右側に聖堂があった。畳敷きのその聖堂に座布団を敷き正座してごミサを受けたのである。普通の家屋としては決して狭い部屋ではなかったが、日曜日などはいつも信徒で溢れていた。祭壇から見て左側が男性、右側が女性であった。夫婦といえどもほとんど並んで座ることはない。ここで多くの信徒が誕生し



たのである。又、日曜日のごミサ前はいつも信徒たちの告解が続き午前9時にミサが始まることは少なかった。早く宣教に出たいと、日本語の勉強もそこそこに赴任を希望した神父の日本語は決して流暢ではなかったが、その熱気が信徒たちの心を適確につかんでいたのである。祭壇の部分は聖域であり、ごミサで奉仕する侍者を特別のお恵みがある者として大切にしたのである。復活祭、クリスマスなどのごミサ後、侍者にはプレゼントのメダイが用意されていた。

聖堂の廊下をはさんで反対側は、信徒部屋というべき差ほど広くない部屋でごミサ後ここでお茶を飲み、色々な話に花が咲いた。そしていくつもの思い出が作られたのである。一番奥に厨房があり、いつもコンソメスープの匂いがしていたが、コックさんを雇いながらも、豪華な食事をしてきた記憶がない。何も付けない食パンをほうばっていた姿しかない。あの頃、冬の寒さは今よりも厳しく、誰もが貧しく、肩を寄せ合って生きることを知っていた。それは最も豊かな国からきた神父が、最も貧しい者に対して献身的で、そして彼がキリストご自身以外に執着することがなく、自分の物を必要とするところへ分け与え、自分の時間すら持たなかった最も貧しい人であったからかもしれない。ただ一つルシアン神父が貪欲であったのは、キリストを賛美するために祝日の御聖堂を飾ることであり、妥協することなくどこまでも自分の納得するものを捜し求めた。それは季節外れの花であったり、祭壇の装飾用のタペストリーであったりした。



美しく飾られた祭壇

昭和33年のクリスマス、20人前後の人が洗礼を受け、洗礼名簿はこの日100人を超えたのである。あの夜、クリスマスの深夜ミサ後のパーティーで、プレゼントだからと暗くした部屋に半間四方ほどあったろうか、四角い箱が持ち込まれ、その中には新しい教会の模型が入っていたのである。これが3代目の教会である。3代目の新しい教会は、更に日本人を意識した趣になっており、小聖堂の窓は障子を思わせたし、死者の祭壇は死者を大切にす日本人への配慮であったろう。聖堂の十字架の背景は金糸を編みこんだ西陣織である。復活祭やクリスマスの前など、日本に来たばかりの若い神父が三脚を立て、食パンでそれを磨いていたのを覚えている。

それにしても、彼はいつ眠りについたのだろうか。聖務日課を果たして、眠る時間のないまま、朝の聖務日課を行ったのではないだろうか。貧しさや、悩みを持つ人のために、少しの時間を、と言われてそれが終日となることは珍しくなかった。あの頃、私は神様がご変容の時のように雲の合間から白い衣で天空に姿を現し、「私のもとに来なさい」といえば、多くの信者が生まれるのにと考えたこともあった。そして2代目の教会を経て今の教会ができた時、この教会に信者が300人になったら、死ぬいとわなれないと思ったことを思い出す。真新しい教会で迎える何回目かの復活祭前後のミサが別れの時だった。神父は、「私の異動を悲しむのなら、私の教えが誤っていたことになる。新しい神父にも私同様に仕えるように」と信徒を諭した。涙と共に。あの日、私たちの心とは裏腹に、御聖堂には日差しが溢れていた。

3代目のアンブローズ神父は、若者たちのためにその手腕を發揮し、青年会や学生会を盛り上げ、信者同士の結婚のためにいろいろな取り組みをし、一方で「終の棲家」を用意して

くださった。ダナン神父は、物質文化が横行しようとした時代、「マリッジ・エンカウンター」によって私たちに結婚生活の大切さを気付かせた。中国抑留の経験を持つジェローム神父は、その極限の中で過ごした苦勞を私たちに見せることもなく、助任司祭の立場でいつも私たちを和ませた。

黎明期の人々のことを少し語らせていただきたい。この50年、教会を訪れながらも洗礼にいらなかった人、洗礼を受けながらも離れていった人などたくさんの方が去来する。その一人ひとりを主は記憶している。その一人ひとりがこの教会を築きあげたのだ。洗礼を受け、今ここに通う人だけが、この教会を継続させたのではなく、神のご計画の中でその時そのときに携わった人々がこの教会を築き上げたのだ。当時、ゲームに長けていた人もいたし、その個性によってその時代をささえていた。だから、主とともにこの人たちを思い出し祈りたい。今も彼らは私より主に近いところにいるかもしれないが。



アンブローズ、ウィリアム神父と(1963年頃)

50周年の祈りの中に「教会のために命をかけて、あなたのみもとに召された司祭や...」と言う一節があるが、正にこの教会の黎明期は彼らのことを思わなければ語ることはできない。だが私達はなんと怠慢であったろうか。今まで述べてきた神父たちよりも多くの、そして信徒一人ひとりに多くの影響を与えてくださった神父のことを正確に記憶していない。だが、全ての神父の眼差しは美しく、キリストに近い存在であると感じたことを覚えている。

80歳を過ぎても、朝目覚めた時、朝の祈りと共に唱えた文語体のロザリオの祈りが時折、口からついて出てくることがある。「清貧の徳を乞い願わん」「人を愛する徳を乞い願わん」「謙遜の徳を乞い願わん」。確かに私達は当時、清貧であり、従順であった。無知であった。盲目的であった。だが、それで良かった。隣人の中におられるキリストに対し、神父と共におられるキリストに対し善良であることが私たちの使命なのだから。



大人も演じたクリスマスの聖劇(1966年頃)

今収穫の時であろうか。そして次の収穫に向けて種を蒔かなければならない時期かもしれない。今この世界に何が必要なのか、変わらぬものはなにか、次の世代に託して久しいが、私たち一人ひとりが肥沃な大地であることを願いたい。

語りすぎてしまったかもしれない。特にこの教会を支えた神父たちのことを。

だがそれぞれの神父がこの太田で働くことは、2000年の神のご計画であるし、時として私達のご計画の中の諸聖人について語る。それと同じ事なのだから。

今夜も私に多くの救いを教えてくださった今は帰天した神父たちと、私より先に帰天した妻に御父への取次ぎを願い、休むのである。